View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究

―日本人の言語観・言語教育観（台湾統治時代の日本語普及政策から）―

末　延　岑　生

はじめに

筆者は戦後半世紀にわたって日本とアジアの英語教育に携わってきたが、以前から心残りであったのが、戦時下で日本政府の実施した台湾をはじめ朝鮮、満州などアジア圏での植民地支配、なかでも日本語普及政策の実態と、その失敗の原因を追究することであった。このたびその機会を得、そこでわかったことは、言語教育に携わる人々がこの失態を反省することを怠ってきたために、その失敗が現今の英語教育の中にそっくりそのまま受け継がれているという事実であった。本稿はこれらを検証するために執筆した。

日本では英米語、中でも一途にアメリカ英語を仰ぐ文科省の検定教科書のもとで、現場の英語教師たちは文科省の英語同化政策で「正しく」「英語らしく」をモットーに同化させているかどうかを一字一句監視され、一方、３千万人の若者たちといえば正しく学んだかどうかを試す数多の試験とともに、国家試験ともいえる厳しいセンター試験を試される。

アメリカ英語をアメリカ母語として、彼らと同じ正確さの音声と文法で完成することを求められる今、文科省・教授者側は学習者たちに、なぜいまだに三単現のｓやr/lの発音識別といった微細なルールにまで執着し、いったい何のためにどこまで完璧に模倣させ、どこへ向かって導こうとしているのか。彼らが旧文部省・文科省から与えられたまるで底なし沼のようなゴールの見えない不気味な目標完遂の使命を考える時、あのおぞましい台湾での政策との類似性に身震いするほどに恐ろしく、人と人とをつなぐことばとしてのあるべき姿と現実との乖離が迫ってくる。

台湾の日本語普及政策は日本語の過度な標準語化運動とともに、日本の言語学の恥ずべき忌むべき負の遺産でありながら、いやあるからこそ、英語に係る人たちは誰も反省するどころか、触れようとさえしてこなかった。こうした体質が今、英語教育の失敗という形で若者に降りかかっていることに目をそらしてきたのであれば、それは学習者に対する許しがたい不作為の行為である。

Ⅰ．日本の台湾統治と日本語普及政策

本稿を執筆するにあたって、筆者は最近ある貴重な書物に出会うことができた。それは石剛『植民地支配と日本語』（三元社1993）と氏の博士論文『日本の植民地言語政策研究』（明石書店 2005）である。両書は51年に及ぶ日本の台湾統治時代に実施した植民地･占領地での日本語普及政策の全容を、社会言語学的観点からの考察を通じて明らかにするとともに、日本人の言語観、世界観を読み解くための、比類ない実証的研究となっている。

日本は戦時下において台湾をはじめ満州国、朝鮮等のアジアの植民地人に対して、日本語の一字一句を皇統のことばとして、誰が何と思おうと植民地人にとって“善かれ”と信じ､“天皇に忠実な日本人になるまで模倣させ､完璧に学ばせ”ようとして失敗に終わった。この負の文化遺産の歴史を真摯に読み解くことで、御著は混沌とした現代日本の英語教育政策のあり方に多くの示唆を与えてくれる。実にそこでは時には暗に予想し、危惧していたよりはるかな、ついには絶句さえするほどの共通点を見出すことになる。

本章では日本の台湾植民地日本語普及政策の経緯と、その内容を概観する。まずその発端となったのが1894年の日清戦争であり、翌年下関条約により台湾は日本に割譲される。それは日本のアジアにおける植民地統治と同時に、外国人である台湾民族に対する厳しい言語統制、つまり日本語普及教育の始まりでもあった。以来半世紀、51年にわたって台湾人民を“尊い日本の天皇の子としての日本人”に変身させるために施したこの“善かれ主義”ともいえる無責任な言語教育の精神とその運営は、日本における言語教育、外国語教育の根底となるもので、それはそっくりそのまま日本の言語学、英語教育に引き継がれることになる。

第１節．外国語を教え、学ぶということ

１．その要因

一般的に言えば母語以外の言語、言語教育学における外国語の教授・学習では、教える側と学ぶ側、なかでも後者からの視点が重要である。その根底には、大まかに言えば（１）誰が誰に、（２）いつ（３）どこで（４）何ゆえに（５）どんな言語、何語で（６）どんな内容を、（７）どのように、どの程度まで学ばせるか、といった条件が考えられる。これらの７つの条件を台湾で実施された日本語普及政策に当てはめ、前半の（１）～（３）まではほぼ物理的に不動であることから簡単に羅列し、特に重要と思える後半（４）～（７）では項目の一つ一つを詳細に検証する。

(1)誰が誰に

戦勝国である日本政府および軍が３歳以上のすべての台湾人民を対象に、日本語普及政

策を実施した。

(2) いつ、いつまで

戦時下あるいは終戦後にも、情勢が変動なく続く限り、植民地人が完全な日本人として生まれ変わるまで。

(3) どこで

戦勝国日本が、敗戦国であるそれぞれの植民地において実施する。

以上、ここまでは時と場所など、ある程度物理的な制約の中で自動的に決定されてきたが、以降については本稿ではより綿密に考察する。

(4) 何ゆえに

日本語普及政策に当たって、言語の確固たる普及の目的、目標、つまり何のために教えるかが当然問題となるから、これ如何によって他の項目はすべて大きく左右される。これが後述する重要な「観点」になると考える。

そもそもこの政策は植民地統治で何か日本にとって役立つものはないかというところから始まったという。石（1993 p. 217）によると「軍事力のほかになにか『日本的』なものがなければ、日本的世界秩序、とりあえず大東亜共栄圏の経営にも支障が生じる。苦慮したあげ句に、ようやくその適任と思われるものを見つけた。それがほかでもなく、日本語の普及であった」というのが本音であった。

そして一旦実施するとなると、文部省の竹下直之は「新しい日本人の形成のため」に、日本語教育振興会評議員志田延義らは「日本を中心に正しい世界秩序に赴かうとするところに意義が見出されなくてはならない。…あくまでも『皇国史的建設』に参加するためのものでなければならない」、その他「植民地人民を忠良な皇国臣民にならせる」ために、「言語的にも文化的にも思想的にも忠実な完全な日本人とならせる」ために、「皇民として恥ずかしくない日本人に仕上げる」ために、とした。これも石（1993 p.218）によると実際は「アジア支配のために、日本語は、言葉としてより、まず一種の『神話』として、宗教に代わる役割を果たすよう期待され、国家の軍事力と結びついてひろめられたのである。」という。

以上の目標を国家的見地から達成するために、必要な言語を教えるというのがその理由である。しかしこのように表面的には日本と台湾という二つの国の真の友好のためにと謳いながら、現実はどうであったか。押し付けではなかったか。この「何ゆえに」が次章から本論文の中心問題の一つとなる。

(5) どんな言語を学ばせるか

日本と台湾との真の友好のために共通語が必要となれば、互いが何語を学び合えばいいかという課題から出発するのが普通だ。しかし一方は戦勝国、他方敗戦国という立場にあって、台湾はすでに日本の一部となっていた。だから当然日本語となる。そこで台湾総督

中川健蔵は「どうしてもこの住民が日本精神をもたなければならん、それにはどうしても国語が必要である」と主張した。

満州事務官兼文部事務官の森田孝は、宗主国の自分たちが「実に異民族の融合を図るには、共通の言語を生活の要素とするのが最も効果的」と、日本語を両者の共通語とし、現地語を一切排除せよと主張した。文部省竹下直之も、植民地人民すべてを日本人へと改造するために「ただ日本語によってのみ、日本人たり得るもの」と主張している。つまり、日本語を以って植民地人民を生粋の新しい日本人に仕立てることであり、その理由はただ「日本語を離れて、日本人は成立せず、逆にまた日本人を離れて日本語はない」からだという。さらに言語学者上田万年はその上日本語の言語学的位置づけ・価値を強め、国語としてその巾を大東亜圏にまで広め、東洋の共通語とするとまで断言した。

(6) どんな内容・中身の日本語を教えるか

以上のような条件のもとで、どんな内容の日本語を教えるか。文部事務官森田孝は、日本語を権威づけるためには「皇統の象徴であるとともに、異民族と戦う武器として存在するのでなければならず、決して単なる伝達や交流のための俗っぽい道具になってはならない」と指示した。

同じく国家的見地から文部省の竹下直之は、植民地人たちを天皇の威光、権威の偉大さを体得させ、同時に日本の偉大さを分からせるよう「宗主国の社会的儀礼、倫理規範など、精神、文化的要素…」を教えるべきだと主張、言霊や敬語を通じて日本精神の神聖さ、国体、皇道文化の優秀さといった国粋的・日本的なものから大東亜文化、東亜の精神血液などまですべてを日本語の中に溶かし込ませ、植民地人民に叩き込もうとした。

こうして３歳以上のすべての植民地人民を対象に、“尊い日本語”を完璧に習得することを強いた。さらに言語学者たちの間では「日本語の優秀性」を強調、台湾で日本語教授をしていた金丸四郎は、教える側も「かくも尊い国語を教授する信念を持つこと」の重要性を力説した。そのために以下の３つの方法が実行された。

①国語としての日本語（母語）を教える

これが学ぶ側にとってどれほど大変なことかは、次章で詳細する。

②言霊が日本語に宿ることを信じさせる

古代人が自然現象の超越的存在に驚嘆し魔力を感じたように、権力者たちのことばにも畏れを以って崇めたことから生まれた言霊を、日本独自のものと見せかけた。

③敬語を使わせる

たとえば保科孝一は敬語を「これこそは日本語の有する一大生命とさえ誇りえるものであり、国体の象徴として、敬語こそ我が国体の精華を発揮しているもの」と見る。さらに

詩人佐藤春夫が「日本語賛美論」を唱える中、日本語を単に伝達の道具として教えようとする人たちを戒め、「ことばはそれ自身が神である」「これは自分のような詩人でないと分らない」と煙に巻き、完璧な敬語を教えるべきだと断言した。こうして実際には多くの条件が付けられた日本語が、封建制の維持とともに、権力者の道具として教えられることになった。

(7)どのように、どの程度まで教えるか

教授目標が決まったところで、その方法とは次の通りであった。

①直説法、対訳法

ダイレクト・メソッドが自然な教え方であることはわかっていたが、実際は授業準備が不要の翻訳法であった。

②権威づけ

文部事務官森田孝は、日本語イデオロギーの極端な自己誇張によってこそ日本語は権威づけられ、日本民族の使命を達成させることができるという考え方を主張した。

③台湾語禁止・罰則

彼らの母語を禁止するということは、個性、歴史、伝統、文化をも消し去り民族を撲滅させることになる。

④他言語を全部抹殺、焼く

暴政の中に見られる狂気じみた暴挙である。

⑤恥の感覚を植え付ける

日本語を強制するために、人類すべてに共通の恥の概念を巧妙に利用した。これは近代国家でもごく普通に行われる姑息な言語教授法の一つである。

⑥日本固有の神を利用

日本という国には物質文明に必要な資源もなく、キリスト教のような世界宗教もなく、他に何の精神面的文化も魅力も持ち合わせていないため、挙句には日本固有の神を引き出した。たとえば1940年満州国に至っては「天照大神」を「満州国の建国の神」として日本語の威厳の維持に利用した。

⑦孔孟の道

国家教育主義学者で台湾総督府随員の伊沢修二は「孔孟の道」を以って教化した。

次にどの程度まで教えるかであるが、日本人として恥ずかしくないほどに日本語が自然に定着するほどの質量を、心身、皇民思想ともに完璧な日本人として認められるに至るまで完璧に仕込むことであり、いずれは東亜圏、世界へと、いわゆる八紘一宇を目指した。その成果はどうであったか。

Ⅱ．日本語普及政策の成果

日本の台湾統治は51年間に及ぶ。日本語教育を受けた台湾の児童の比率は、1889年には２％、1918年は16％、1931年には70歳以下の台湾の人民には男女を問わず日本語を学習させることに決定したため、1935年には41.5％、1944年には71％と増加した。1941年の『台湾事情』によると、日本語教育を受ける台湾人生徒数は76万人、1942年には320万人となり、台湾人口の57％が日本語を学習させられた。その後山奥の少数民族にいたるまで隈なく波及させたが、普及率と強制度は比例したといわれる。

次章で言語学、言語教育学の立場からその原因を詳しく解明するが、限られた時間と費用、戦禍の中で、台湾だけでなく朝鮮半島、満州国をはじめとする中国大陸、東南アジア地区の同時対応に追われた。そのためほとんど政策を練る時間的余裕もなく、横の連携もなく統一に欠け、学習するテキストの予算、整備の程度、政策実行のための費用も貧弱なものであった。そんな中にありながら、1940年以降は学校用語もすべて日本語が強制され、各省庁の会議も日本語のみで、日本語検定試験で成績がいい者には「語学加俸」として支給が増額された。ラジオ、新聞のマスコミも書籍も日本語中心という有様だった。そのため人民の間に大きな反抗勢力を生んだ。

さて日本は世界に向かって満州国独立を宣言、国民の誰一人の母語でもない日本語をその国語にすると宣告した。これは世界で例のない大事業であり、小学一年からはじめることになり、全授業の半分あるいは上級では３分の２が必修日本語とした。1938年に日本語を満州国の国語と規定したが、40年にわたる関東州での植民地人民の日本語の理解者率は６％、日本語常用者といわれる率は０％であった。満州国には日本人開拓民が約155万人いたが、彼らは土地の言語（満州語）を極端なまでに拒否した。朝鮮でも台湾、満州を上回る厳しい政策が続けられたが、一方日本人はそこに20年暮らしても単語の８つから10くらいしか知らなかった。

朝鮮は併合31年で理解者率が15%だったが、台湾では1934年30%、1940年には51%へと上がったというが、これは締め付けの度合いと比例した数字だと思われるのと、これが台湾総督府の記録であり、極度に水増ししたものと考えられる。それよりこの政策によって受けた植民地人民の屈辱は到底数字には表わせない。石は日本語普及政策が「おもに軍事力を頼りに日本語の普及をはかろうとし…軍事的手段なくしては、日本語の普及は考えられないものであった」と述懐している。

そもそも台湾統治当時“台湾皇帝”とも呼ばれ怖れられていた台湾総督府伊沢修二でさえ政策実施に当たって「今日までは兵力を以て之を征服した台湾であれども、是れから後に人民の心の底までも之を服従せしめる事が出来るか否かは、真に此の台湾が、千万才日

本の土地になって往くかドウかと云ふ大問題…」と不安を打ち明けていた。この予感が現実のものとなり、政策の成果は惨憺たるものとなった。

Ⅲ．失策の原因

第１節　言語の観点

１．「心ひとつが我がの理」

日本語普及政策の失敗の原因を探るにあたって、筆者がかつて母から受けた、これこそが後に「言語の観点」といえるのではないかと考えるに至ったある不思議なことばについて、僭越ながら述べさせていただきたい。遠く60数年も前にさかのぼるが、ことばづかいの荒かった私に母はいつも「人は美味しい空気を吸わしてもらうかわりに、お返しに人様に喜ばれることばを使うんやで」という母のことばは、当時小学生の私にはあまりにも衝撃的で、生涯忘れられない言葉となった。

５年生になって父から英語の手ほどきを受け、将来英語の先生になりたいといった時「ことばは肥。声は肥。ことばというのは人様を励ますため、勇気づけるため、褒めるためにあるんやで」とか「ことばは女の人が優しく教えるもんや。だから女の人は透き通って明るいきれいな声が備わってるんやで。」「世界の人はことばは違っても心はひとつ」でも「うそと追従、高慢はいかんよ」とも。なるほどと思った。

生意気盛りの中学生になると、好きな英語のちょっとした間違いを人前で厳しくののしる先生たちに反抗的になり、母がそのたびに、「心ひとつが我がの理やで」という不思議な諭しのような言葉が連発した。やがて学校の検診で将来「肺」の病いの気があるといわれた時、母は一言、「人様に素直に『ハイ』といえるように」。そのうち治った。母が言いたかったのは「自分の心の中で何を考えてもそれは自由だが、ことばは心から出てくるもの。でも人が一たん口に出したことばは自分の責任」と悟った。お伽噺じゃあるまいしそんな非科学的な、と言われそうだが、元はといえばことば自体も恣意的で非科学的な産物である。

２．ことばと「自己責任」

生きとし生けるもの、すべての人間には生まれつき心の自由が与えられているから、人は何どきであろうと、いかなる観点を以って心の中で何を考えようと思おうと、時には口に出して何を言おうと自由である。自分の能力の範囲内でその考えを実行しようとしまいと自由である。心に思ったことが超人のようにすべて実現するわけではないが、一たん口に出して行動した結果をどう解釈するかも本人の自由である。ただ、そこにはかならず「自己責任」が伴う。ミツバチにも言語があるが、そこには人間のような自由が伴わないこと

も学生時代に社会学の授業で知った。人はそれぞれの観点をもってことばを生成し、使用する。ことばも一人一人が思い通りに使えるが、そのことばには必ず使った人の「自己責任」が伴う。でなければそれは「嘘、追従」となる。

「心ひとつが我がの理（The mind alone is ours.）」というこの言葉は、やがて「自分の持ち物で自由になるのは心だけ」で、そのほかはこの世の自分の持ち物どころか自分の身体さえも自然からの「借り物」だ、と理解するようになった。病気になれば身体もことばの自由さえもきかないし、あの世に持ってゆけないからだ。筆者が言語の観点からも以前から提唱（末延2004 p.75, 2005 p.80, 2006 p.102）してきたように、心に代わるものとして、心に準じて言語にもこの思想が共通していると考えるようになった。その原点は中国の明（1368-1644）の時代に陽明学の祖王陽明（1472-1528）が万物流転、大宇宙の自然の移りかわりを観察する中でひらめいた発想であるとされる。陽明学は江戸時代に中江藤樹、熊沢蕃山によって多くの武将・武士たちに、また中山みきの場合は親神の啓示によって天の理の教えとして民衆の心に深く受け入れられた。母の不思議な諭しはここにあったのだ。

西洋でも言語の起源を考える時、たとえば『言語起源論』の著者ヘルダーの内省説の中にその片鱗が見られる。牧師であり言語学者であった彼は、キリスト教の「初めに言葉ありき」の啓示に突き当たり、そこから人間のことばの自由を導くことに躊躇したヘルダーの苦しみを筆者は描いた（末延 2004.3）。「はじめに言葉が神によって作られた」というのであれば、人間は最初から言葉も心も自由はなかったということになるからだ。とはいえ人間がことばを造ったとなれば、「心もことばも我がの理」といえば聖書のことばに背くことになる。筆者が言語の起源を「仕込み説」として提唱したゆえんである。しかし、後述するホイットニーやソシュールが、「初めに言葉ありき」をどう解釈したのか。それとも無視し、飛び越えたのであればガリレオの地動説やダーウィンの進化論のように、彼らも神を冒涜することになる。

さてはじめに戻って、何らかの理由で心身ともに拘束されている人間を除いて、「心ひとつが我がの理」という言葉には、世界中の人間の心は本来自由であり、どんな観点を持とうが心通りその言葉通りに実行しようができまいが、その使い方も自己責任の範囲内で自由であるという意味を持つ。人間には「はじめに言葉ありき」ではなく、言語とは本来人間の中に仕込まれた心と脳･脳神経系、発声･発声関連器官とが自然の摂理に遵（したが）いながら､社会の中で助け合って恣意的に造り上げた産物･形態であり､元は自然からの「借り物」にほかならない（末延 2004, 2006）ということであろうか。そうであれば言語は元来恣意的だから、言語を純粋に科学的数学的に扱うには無理があり、言語学者は人文学者やヒューマニストであっても、科学者と呼ばれるような高慢な態度で研究すべきではないと考えてきた筆者は間違っているだろうか。

３．日本語普及政策の企画にあたって

ここで日本語普及政策の核心に入る。政策の企画と実施に当たって、為政者や言語学者たちはどのような観点に立ってこの政策を実行したのか。まず植民地人にたいして威厳を持たせるために“言霊や敬語を添加し、日本語母語を完璧に学ばせることの異常さ”と、そこに潜む重大な危険性を指摘しておかなければならない。そのために同時代の19世紀後半から20世紀にわたるヨーロッパでの言語学の動向に触れる必要がある。

それは奇しくも後にコペルニクスやニュートンの業績に例えられ、近代言語学の祖と慕われる、もしかすれば日本の言語学にも偉大な福音をもたらしたであろう一人の偉大な言語学者の活躍した時代であった。F. de ソシュールはスイスの言語哲学者で、近代言語学は20世紀の初頭に現れたソシュールにはじまるといわれる。彼がジュネーブ大学教授（1891-1913）時代に大学等で講義した〈一般言語学講義〉を通して知られる彼の理論は、人間の言語能力をlangageと名付け、これを社会的言語langueと個人的言語 paroleとに分類したことで、構造主義言語学（構造言語学）の原点とみなされる。

しかしむしろ彼が言語学に遺した最大の業績は、言語学の根底にあることばの実体とその意義にかかわる哲学である。ソシュールによると、他の科学・学問と違って言語学にあっては、「言語学の十全で同時に具体的な対象は何か。…観点に先立って対象が存在するのではさらさらなくて、いわば観点が対象をつくりだすのだ（下線筆者）」（F.deSaussure 小林英夫訳）という。

母のことばとともに、筆者は身震いのするほどに衝撃を受けたのを覚えている。つまり言語学の具体的な対象というのは、科学研究の場合のように元々何かが存在していて、その何か（対象）を様々な観点から眺めるというような結果的に扱うものではなく、逆に人々の様々な眺め方、つまり観点の方こそが先にあってそれが何かを造りだす。そこでできるものが対象ということになる。ことばは人それぞれが眺めたとおりの、眺め方に相応しいものとしてでき上がるという、とてつもない賜物ではないかと筆者は解釈した。たとえば子どもを大人の未熟な存在という観点で見るか、無限の能力を持った存在と見るか。自分の観点に立って眺めて作りだされた対象であることばは、自分の思いを裏切らずそのまま何でも言葉に託せるほどに従順だとすれば、ことばを「万人の平和のための賜物」と見るか、「自分の家来」と見るか。

うーんと唸らずにはおれない。この言葉こそガリレオの「それでも地球はまわっている」に匹敵するだろう。どれほど多量の言語学に関する書物を読んで言語学の知識を“科学的に”広く深く身に着けたいと願うよりも、言語学の根源はこの一つのことばに集約されるといっても過言ではない。「初めに言葉ありき」ではなく「初めに観点ありき」ではないか。これぞ言語の原点、ことばの生まれる命の元であり、これを認識し、人が人格相応に様々

な観点をめぐらすことなしに言語学、ましてや多くの人たちのために言語を教育する使命を持つ言語教育学に触れるとすれば、言語を単に科学的、水平的に見る時にはその方向を見失うばかりか、垂直的には言語の底なし沼に陥るだろうと考えた。筆者は学生たちに、毎日これさえ考えて言語研究をしていれば、立派な言語学者になれるだろうといってきた。

筆者自身の解釈だが、「水は方円の器に随う」といわれるように、言語の観点から産出される対象とは何かと問われれば、それは水や粘土のような素材を造る機能が人間に最初にあって、眺める人の観点によってどんな形にも自由自在になると考えるとよいのであろうか。使う人の観点が異なればそれは毒にも薬にもなる。私たち日本人は社会生活の中で言語という形で、一人一人が、国家が、原発にも核兵器の原料ともなりかねないはかり知れない力を持っていて、さてそれを何に使おうかと思いあぐねている姿を想像すればいいのだろうか。

さて、ソシュールが観点の重要さを認識した発端となったのは、アメリカエール大学教授で『言語の生』（1875）の著者W. D.ホイットニーであった。彼は、言語をそれ自体では発達する有機体などではなく、言語を使う人々の社会、社会制度と見ていた。この観点から、ソシュールは「観点が対象を作り出す」という発想を生み出した。このホイットニーこそが当時、明治初代（1873）の文部・外務大臣森有礼が日本人の母語である日本語をすべて英語に変えようとしたとき、相談を持ちかけた学者である。ホイットニーは言語の観点からはっきりと森の無謀さをたしなめ、日本国民が英語を国語として選ばされるはめになる（これは後述するように、奇しくも現今の英語教育となって甦ってしまったのだが、）ことから救ってくれた大恩人であったこと（末延 2015 pp.35-37）は、よもや当時の言語学者たちなら周知だったはずである。

このように、何をおいても観点が定まらないと言語学は成り立たない、とソシュールは考えただろうし、私たち言語教育者も観点が定まらない限り、軸が固定されない限りは、言語の本質に沿った言語教育は不可能と考える。言語と心をこのように考える時、あえてかこつけるつもりはないが、ひそかに筆者はソシュールが「言語においてはすべてが心的」といい、心ほど難しい物はないと述懐しているように、彼の「観点が対象を作りだす」ということばと、先述した王陽明、中山みきの「心ひとつが我がの理」の間には、言語面にも深い関係があるのではないかと想像し執筆してきた（末延 2004, 2008）。「ことばひとつも我がの理」と。田中（2001 p. 99）も「心の問題は言語研究の最も厄介なもの、自然科学から守られた最後の砦」と表現しているが、筆者はこの砦の中身を亡き母から授かったのではないか自問し、このソシュール哲学の啓蒙のためにはまず「観点がことばを作る」と易しく言い換えてもいいのではと考えた。

ちょうどこの時期に日本語普及政策の中心人物であった言語学者こそ、先述の上田万年

である。帝大教授（1894-1905）、文部省局長などを歴任し、後に日本の近代国語学の生みの親といわれた万年は、運よく時節に恵まれドイツ留学によって、当時ヨーロッパの言語学の先端を走っていたソシュール言語学の「観点」の重要さ、近代言語学の成果を学んできたことは必至である。

彼は運よく言語は言霊や因習、先入観などにとらわれるようなことなく、単なる物理的な記号であるとする当時では斬新な言語学の考え、日本人として初めて科学的で先駆的なとらえ方に驚嘆を以って学んだことであろう。だから当時のヨーロッパの言語学では人々が戦時下で勝ち取った「母語の概念」が解析され啓蒙されていた真只中にその影響を受け、当然母語としての日本語に対しても、全人類、個々人の共有する理論として位置付け、これをいち早く理解し持ち帰って日本の言語学発展のために広めようとしていたことは十分に予想され、期待したことだろう。

第２節　政策の根底にあるもの

１．支配者たちの言語観

日本政府・軍は台湾の日本語普及政策で、どんな観点でもって何ゆえに、どんな日本語を教えようとしたか。その中にあって万年をはじめ言語学者たちは、助言者としてどんな観点を以ってこの国家的な政策に臨んだかを順を追って詳細に述べる。

本章の最初にソシュールの言語の観点に触れたことで、当時の為政者、言語学者たちの観点がつぶさに見えてくる。日本政府の指導者たちが植民地人に何ゆえに言語を教え使わせるか。どんな目で、どのような観点、目的、魂胆、あるいは偏見を以って言語を捉えるかによって、教授方法が自然と限られてくる。言語を教育する場合は言語の平等さという大前提はもちろん、利己に偏した利得や利権は禁物だが、台湾総督中川健蔵は「日本語を離れて、日本人は成立せず、逆にまた日本人を離れて日本語はない」という。日本語を学ぶ過程でこそ自然と日本人精神ができ上がるはずだととらえたのであろう。

総督府の伊沢修二は日本語を単なる語学としてでなく、日本精神に触れさせるための媒体として把握し、植民地人民を日本国民に育て上げるところにその方針を見出した。文部省の竹下直之は「日本文化、日本精神の権化としての日本語を何よりも先に教えなければならん」と、天皇に忠実な下臣として天皇の威光、権威を体得させ、日本の偉大さを身を以って理解させるべきだと主張した。文部省の森田孝も前述のように、日本語以外の他の言語、つまり植民地人民の母語の習得使用は一切排除されるべきだと提案した。こうした観点から日本語をもって植民地人を自分たちに都合の良い家臣･家来になれるように育て、日本の来たるべき世界制覇のために隷従させようとしたと考えられる。

上田万年は、ドイツで学んだ言語哲学から程遠い「母語」の概念を為政者・軍人の観点

を以って抹殺し、日本の母語を日本帝国の「国語」と位置付け、これを東洋の共通語にし、その大きな網をもってアジアの言語を一網打尽にし、日本国語として統一しようと企んだ。日本語を東亜語に格上げし、世界語へという構想である。万年のドイツで学んだはずの言語の観点ははからずもこのような対象を目指してしまったのである。以後、上田の思想は国粋的国語学理論として山田孝雄や保科孝一に受け継がれるが、本質的には現代の言語学もその観点は、欧米の模倣・国家的意識の域を脱出しているとは思えない。石はいみじくも「いずれも国家的手段によって、理論と実践の両面において、各地方の方言あるいは各民族の言語に、たとえそれがどんなに小さい言語であっても、みな平等に存在する権利と価値があると信じる言語学が尊ぶ精神を蹂してはばからなかった。こういう国家主義のにおいが強い日本の言語学の風土は、日本の植民地での言語政策にも投影している。」という。

２．宗主国家語としての日本語

台湾の学校教育では1910年代から台湾の母語の使用が厳しく禁止され、日本語を国語という名のもとに、実際には日本語母語をそのまま押し付けられたと考えられる。それはこの政策の実行の途上で日本語自体の不完全さが次々と発見され、教育の混乱が生じたことから伺える。

では言語学者たちの「国語」と「母語」に対する考え方はどうか。人間が人間であるための最もかなめであるべき母語に対する「観点」を、万年はどうとらえたかが最も重要な関心事である。これほどの大切な言語の根幹を、言語学者が無知であったとすればどうだろう。台湾の日本語普及政策では、言語をどのような観点で捉え、それはどのような姿となって働いたのだろうか。

上田万年はこうした軍国主義の真ただ中で、次第に政治家、軍部との癒着が深まったようで、他言語と同様に日本人の日本語も本来単なる記号として無色で素朴な母語であることを承知の上で、国家を象徴づける「国語」という名のもとに軍国日本の国体の標識として摩り替え、政治色を持たせて植民地住民に押し付けることとなった。

さらに万年の弟子で1924年当時京城大学教授であった時枝誠記も、時代の波に押し寄せられ、ソシュールに対抗して日本語ナショナリズムを武器に差別的な「言語過程説」を唱え、本来の日本語を実質的に、宗主国家語に昇格させていった。ここが言語に対する観点の問題であって、日本の言語学者たちが陥りやすい罠であった。こうして結局は植民地人たちに日本語を国語として負わせることとなったが、それはどのような方法で行われたのだろうか。そこには官・軍・言語学者たちの巧妙な秘策があった。

(1) 日本語を日本帝国の国語として教える

政策では結局日本語の母語に威厳を加えて国語という名の元に教えることになったが、その決断は学ばされる植民地人にとってはどのようなことを意味したか。「母語」とはあ

る個人もしくは集団が人生の最初に、好む好まないにかかわらず、その環境の範囲内で習得する最も大切な言語である。それだけに発音も文法も慣用語も、誕生後一たん身についてしまうと決して離脱することのない、他の言語と決して取り替えできない指紋のような言語であり、アイデンティティそのものである。だから当然彼らにも文化に相応しい密着して存在する母語がある。ところが実際は万年のいう「帝室の藩屏」「国民の慈母」「日本人の精神的血液」と論断してきた日本帝国の国語という名のもとに、日本人の単なる母語としての日本語を、分りやすく噛み砕くこともなく、逆に天皇の、神のことばとして植民地人に強制することになった。

翻って考えてみよう。人が自分の母語以外に外国のことばを学ぶ過程には、どのような葛藤があり、心身にどのような影響、変化をもたらすだろうか。言語教育上、この場合のように、互いの母語間に存在する言語構造上の「距離」が膨大なものであればあるほど、困難度が増す。これは教育方法如何では自分の精神の中に別人の人格を埋め込むという大変危険な行為となる可能性がある、と筆者は警告してきた（末延 2004）。アメリカの心理学者J.J.アシャー（Asher 1969）は、３～５歳を超えると他国の母語を完ぺきに獲得することは不可能で、本来の母語が干渉を起こすからという。

時には日本人でさえ使い方を間違うほどに複雑な日本語を、突如として日本とは全く何のゆかりもない他国民に、単に真似させ学習させるレベルを越えて、母語として学ばせるという条件だけでも、とてつもない困難なことだが、日本人の“魂”とともに母語として完璧に模倣させるという残忍な場面を誰が想像できるだろうか。その上、ドイツ留学で「母語」の重要さを十分に学んだはずの万年と為政者たちは、さらに彼らの母語をさえ禁止した。人体実験と言われても仕方のない行為、まちがった観点のなせるわざである。

言語発達・言語教育の上で模倣や真似は重要な要素であることは論を待たないが、他種族の母語を完璧に模倣させることは、種族が先祖から受け継いだ自分の容姿やしぐさだけでなく、種族特有の口腔の体積、唾液の濃度、舌の厚さと長さ、顎の骨格、それに各人固有の精神までをも当該種族に似せて整形するに等しい、人間の尊厳どころか精神にさえ異常をきたす、生命に係わる危険な行為である。ましてや成人の日本人でさえ完璧な日本語を完璧に使えるものは一人としていない。

さらに母語というのは日本人だけが持つのではなく、全人類がそれぞれに持つ独自の言語である。ところが日本語の母語だけに慈母の優しさや精神的血液があるのかということになると、そうした矛盾を覆い隠すためにこそ彼らの母語を抹殺、日本の国家的見地から「国語」として日本語を教えることになる。

(2) 国体・皇統の標識としての日本語教育

どういう日本語を普及すべきか。日本の天皇、皇統の象徴であるかのように打って出た

尊かるべき日本語を教えるということは、低級な成果のままで終わらせることは意地でも許されない。何とかして現地人たちに見透かされないように“威厳”を貼りつけなければ“沽券”に係わると考えただろう。だからこそ余計に完璧でなければならない。こうして日本語の中に政治的属性を盛り込み、国家による言語の介入を主張、国語としての日本語を国体の標識とし、「帝室の忠臣」、「帝室の藩堀」として位置づけ、「国民の精神的血液」「国民の慈母」とした“国語愛”へと発展させた。

(3)宗主国家語

宗主国家とは、従属国に対して言語・内治・外交などのあらゆる権力を強制的に行使できる国のことで、そこで使われる国語を田中は「宗主国家語」と呼ぶ。台湾総督伊沢修二は台湾で日本語の中に皇統・国体等を織り込むことで日本精神となし、「宗主国家語」としての発想の基盤を作り、この思想を運用し始めたと考えられる。

こうした宗主国家語としての日本語イデオロギーの観点から、山東省教育訓練所教官工藤哲史郎は「日本語教育は単に外国語としての日本語ではなく、あくまで新東亜の歴史の世紀的創造の一翼としての日本語、すなわち東亜語でなければならない」、さらに彼は日本語の教材は学習者にとって「絶対的迫力をもって迫る心理的意義を有」し、「ことばは宗教に於けるバイブルの如く、神聖なる真実性をもって心理的に迫るもの」であって、それは「日本語教材教授の毛細管に至るまで貫通しなければならない」とけしかけた。だがこれはドイツのビスマルクがポーランドでおこなったゲルマン化政策をそっくり真似た方法であった。万年をはじめ言語学者たちは、こうして熱狂的な日本語の国家語イデオロギー論者となり、まるで勲章のように天皇の権威が盛られた日本語に以下のようにより権威化し、宗主国家語として“出世”させることとなった。

(4)言霊教育

言語学者や軍部たちは日本を「言霊の幸ふ国」と自称し、日本語の中に政治的な性格を盛り込み、圧力を加えるための権威化から神格化へと利用した。それが言霊信仰である。たとえば古代の日本人が自然現象に対して畏敬の念や信仰を持っていたのと同じように、軍事用語など自ら造り上げた都合のいい言葉に対しても、言霊と称して超越的対象として利用し、時には脅しに使った。彼らはこれを「日本国民の本質のもの」「国体と不可分の関係」ととらえ、有無を言わせず母語としての日本語に織り込んで模倣を強制した。こうして日本帝国統一のため、日本語の同化をますます強めようとした。このように、日本の言語学の根底には元来論理的には説明のつかない、謎めいた日本古来の言霊の思想が今に繋がって滔々（とうとう）と流れているといえる。

(5)敬語教育

言霊とともにさらに日本語に威厳をつけるための方法の一つとして彼らは敬語の存在を

見逃さなかった。所詮は身分差別のための符牒に過ぎない敬語だが、聞き手にとってはごく満足を感じるもののようだが、話し手にとってはこれほど厄介なことばはない。詩人佐藤春夫は敬語を国体・皇統と結びつけて高く讃え「敬語のない日本語は日本語ではない」と主張、基礎から完璧に覚えるよう提案した。

３．国体としての日本語教育

ここまで来るとすでに日本語は、天皇の威光・権威を体得させるため、植民地人たちを天皇に忠実な下臣として育て上げるためのことばとなった。文部省の竹下直之が「日本文化､日本精神の権化としての日本語を何よりも先に教えなければならん」といったように、国家的見地から、言霊、敬語、国体、加えて「宗主国の社会的儀礼、倫理規範など、精神、文化的要素」を教え込み、天皇の威光、権威の重圧を体得させ、同時に日本の偉大さを分からせるよう日本語を詰め込む、というのがその第一の目的であった。人権を無視したこのような教授法は、まるで働き蜂の言語学習と寸分変わらない。こうして舞い上がった宗主国家語イデオロギーは、“尊い日本語”を定着させるために、次のような面から植民地人を規制するようになった。

(1)植民地人の母語使用禁止し、罰則を与える

志田延義らは日本語をあくまでも「皇国史的建設」に参加するためのものとし、日本語の不完全さを議論すること自体を堪えがたいものとした。現に台湾や朝鮮などで、学校用語からの母語の排除、公用語、軍隊語としての日本語強制、それに従わない者は科料に処し、また厳しい条件による「国語常用家庭」の認定など、相手の言語への理解どころか、蔑視と言語差別、そして植民地人の母語を焼くという始末だった。さらに日本語常用家庭の者以外は公職につかせず、給与も日本語能力に応じて支払い、公の席上では現地語を禁じ、全現地人に日本語力テストを行った。また汽車やバスなどで現地語を使うと下車を命じられた。

一方林献堂らは「一国の文化の精粋を表すべき符牒即ち文章は、その国の人によってのみ創造し、改廃せられるべきもので、他国人の容喙を許さぬ性質のものである」と主張、批判を許さない「正しい」言葉づかいへの道をつけていった。そんな中で安藤正次や従軍記者の石橋恒喜が､「彼らの言語･風俗･習慣を勉強してかかるのが順序だ」と主張したが、大波に被さるように消えていった。

(2)恥の感覚を植え付ける

日本語ができないことを恥とする文化を打ち立てるために、職場や授業で日本語のできない人々を笑いものにして恥の感覚を植え付けた。

(3)孔孟思想を以って啓蒙

伊沢は「孔孟の道」を以って教化した。これは封建主義下の日本でもお上への忠孝を促

すためには大いに役立ったが、孔孟の正当な教えは逆に殖民地経営に不都合な面も多く、政策との矛盾点が明らかになるや否や逆効果になり、引っ込めた。

(4) 日本固有の神を利用

為政者たちは次々と失敗を重ねるうち焦りが高じ、ついには「天照大神」さえも“満州国の建国の神”として参拝させ、多くの神社を建てたものの、抵抗する者を不敬罪人として罰するための踏絵となった。

(5) 皇民化運動

国家神道による宗教的・思想的統制を厳しく行い、台湾では最も屈辱的な改姓名、朝鮮でも創氏改名を実施した。

(6) 日本語の神聖化から象徴化、舞い上がり、そして非実用化へ

日本語神聖視の度がすぎたため、日本語イデオロギーのお仕着せの権威ででっち上げた日本語を、宗主国家語として出世させることとなり、日本語はことば本来の、肝心のコミュニケーションの道具としての機能が人間から離れて、天高く舞い上がった。

(7) 日本語自体の不完全さに翻弄された

国外に出た日本語を客観的な視点から眺めると、不備がはっきりと見えてきた。

(8) 統一した教授法の不在

戦時下直後の台湾、満州、朝鮮での日本語普及政策はそれぞれが未経験のため、また、教科書の編纂上の問題や、最も大切な教授法の問題について統一性がなかった。たとえば「あなた」「私」といった人称の整理や語尾の「です」「ます」といった「簡略日本語」の提案も文部省等から“尊い日本語”に手を付けるなと一笑に付された。

(9) 享受者の質の低さ

植民地人の母語を禁止するというこの残酷さは何をおいても比類ないもので、教養ある植民地人民の抵抗も当然大きかったといわれる。質の低さは享受者ではなく、これほどの残酷なことをやらせた為政者とそれにまとわりつく言語学者たちである。

第３節　植民地人の抵抗

１．信用の失墜

台湾の人たちとは表面的には民族間の融合を唱えながら、台湾民族の心理や希望をことごとく踏みたおした。この政策は西洋の植民地政策をそのまま真似たもので、基本的人権、投票権など何の権限も与えられず、幼稚で差別的だったと世界から酷評された。また日本語学校の現状では『台湾教育(1938)』には「日本帝国全体より考察するならば台湾の現状は余りにも悲惨であり、日本帝国の一部として、恥辱とさへ考えられる」と指摘されている。

２．政策の稚拙さを見抜く本能

全体的に見て文化的水準の高い地域原住民族、教養の高い現地人民ほど、日本語に対する抵抗が強かった。そのような中で彼らは日本語の言霊や封建制の強要となる敬語による服従など、彼らの命令に臆することなく、騙されることなく、あちこちで民族が結束、反抗心をもって正々堂々と人民蜂起を繰り返した。当時柳田國男が、彼等の学ぶべき何物をも含まないからだと一蹴したように、日本語教育には内容的に学ぶところがないということと、日本語のことばをマネさせられることに屈辱感を覚え、外部の強制に屈しない強い精神を持っていたからである。

彼らは言葉を所有する本来の人間として本能的、直観的に、潜在的に賢明であったからで、言語の最も基本的な優れて人間的な観点を持ち、真実を知っていた。言語学者でもない平凡で素朴な一般市民としての人間の眼識が、言語学の本質、つまり「言語は伝達の道具である」という前に、「観点が対象をつくる」という哲学が言語の本質であることを本能的に認識していたのである。

第４節　失策から学ぶか

台湾をはじめ満州、朝鮮など多くのアジアの国民に対して実施した日本語普及政策は、日本の敗戦とともに失敗に終わったが、全面的な加害者としての日本国・日本人は、何の反省もなくこの21世紀を迎えた。この現実に日本国民のいったいどれほどの人たちが我が胸に手を当てながら、加害者として反省を覚えているだろうか。その数もその悔恨の深さも正確には推し量ることはできないが、この失策から次代の世界中の人々のために大いなる何かを学ばなければ、犠牲者の人々に申し訳が立たない。そのためにはこの政策の真っただ中にあって為政者や言語学者たちは、どのような言語学的観点を持ったかを追跡する以外にない。

１．言語学的観点を持つこと

日本語普及政策は、総じて台湾ほかの植民地人との互いの幸せを願うことより、日本語教育を通じて神国日本の威厳を見せ付け、彼らに日本語を授けて日本への隷従を強いるという観点を持って実行した。そのため、あらゆる国家規範から自由であるべき植民地人のための生きた民衆の言語、母語を攪乱し、苦しめることとなった。石（1993 p. 119）は理性ある言語学者のあり方を示す次のようなことばで「民族の心理や内的要求を踏みにじってはかられた『異民族の融合』は、弱肉強食の帝国主義論理の所産にすぎず、有益な文化交流や歴史の必然的趨勢とは無縁なものである」と締めくくる。

さて、敗戦によってこの政策は失敗に終わり、その責任の所在はあいまいのまま21世紀を迎えたが、人間のもつ言語というものは本来どのような観点にあるべきか、両国の立場

を考慮しながら検討を進める。

言語は社会の中で生まれたもので、人々の助け合い、人類の平和のためにある。言語の根底は「社会」に出発点を持つ。言語は社会の中で相互協力するために生まれたものだから、互いに言語を通じて人間の意思、意味を伝達し合い、理解し合うことが第一である。言語をこのような観点に立って考えれば、人間社会に健全な言語学が発展し、それは言語教育にも貢献する。

しかし今回の政策は事の発端から、強い方の社会が相手の社会を一方的に支配する、という手段を用いて、相手を屈服させて当然という単純な観点から実施した。半世紀にわたって台湾の人々は自分たちの母語を禁じられた挙句、異国の日本語母語を強要され、一生を棒に振った人たちも大勢存在したことは必至である。一方現地の日本人たちは何年も滞在しながら、覚えた単語が６～８個に過ぎなかったという。この場合のように、言語教育の観点の中に人間の生活する社会というものを無視して、強者が独裁するような邪まな意図が存在していれば、どのような言語学も言語教育の助けにならないどころか、両者が失敗に終わり、社会組織も学問としての言語学も崩れる。そしてそれは現実となって、大日本帝国は崩れた。

このような、ある言語理論がその根底に社会的協力を無視し、話し合いもなく強者の側の一方的な机上の論理を持って出発すれば、社会の相互関係という根底を無視した、観点の定まらないその言語理論は、論理自体その根底が人間社会では成立しない。

とはいえ人間の社会では、前述のように心もことばも自分ひとり、自由に好きなように自分の頭の中ではめぐらすことは自由であり、何の責任もない。自分の頭の中だけなら人を殺めたり、たとえ大臣であっても憲法で戦争放棄を謳う国で核保有を促す進言を妄想したり、自分の心の中だけで密かに抱いても、それだけなら責任を負うことはないだろう。こうした政府の煽りを受けて国の存亡を憂う青年がヒトラーの戦略を真似て、自分には「戦時下で邪魔になる障害者を480名も殺める力がある」と総理大臣に進言するのも自由だということになる。そんな小説やサイエンス・フィクションは数多ある。むしろ戦争前夜や戦時中ならそれを進言し、実行しようものなら表彰ものだろう。同じように植民地人に言霊と称して日本語を強制し、現地人を天皇の皇民という名目で実際は隷属させるという妄想を抱いても、それは妄想の世界の中だけで許せることだ。

そこで万が一、一国の政治を司るべき人間が国民にそれを口にしたとすればどうか。その国だけでなく世界中が戦争の危機に陥ることは火を見るより明らかである。それに万が一その企てを文書で公けにすればどうだろう。それ自体がすでに戦争国家としての機能を世界に向けて発揮する。ところがそれをかつて実行したのが太平洋戦争であり、台湾をはじめアジア圏植民地での日本語普及政策であり、これらは決して「自己責任」は免れない。

でなければそれはことば以前の「嘘と追従」となる。しかし台湾の日本語普及政策の為政者たち、軍、それに言語学者たちは、天皇のあらん限りの威厳と権威、威光を巧妙に駆使して言語征服の妄想を実行に移しながら、敗戦とともに一挙に自分たちが犯した行為の「自己責任」を時の天皇に転嫁した。

人間の言語は人間の社会生活の中で生まれたものであって、自己責任を土台としてこそ使われるものである。支配、被支配に拘らず共同社会から遊離し、相手の心やことばを無視して一方的に弾圧する自己中心的な論理に基づいた言語理論で武装しようとも、それは天皇の権威と威光を利用した虎の皮を被った狐、独裁者のたわごとでしかない。いつの時代にあっても、いかなる理由があろうとも、ことばを教育する場合、決して自己の利得や利権を目的とした観点から言語を弄び、操ってはならない。それは言語を用いる人間の目には見えない社会の契約であり、破れば社会は崩壊する。

人が「自己責任」を自分たちにとって頼りがいのある天皇にそっくり転嫁したつもりになって、謙虚であるべき反省・自省のためのエネルギーを失速させた時、次の世代にどれほどの大きな苦しみと禍根を残すことになるか。次章ではそうした戦後の日本人言語学者・英語学者たちのたどってきた英語教育の観点を検証する。

Ⅳ．失策の復元―現代日本の英語教育との共通性

日本語普及政策によって台湾では母語の使用が禁止され、日本語を新たな母語として強制的に学ばされた。言語学者たちは殖民地の人たちの台湾語も当然彼らの母語だから、日本語と同様、公平に敬うべきことは当然知識としては持っていた。しかしその矛盾を無視し、“尊い日本語は低級な成果では決して許されない”の指令のもとに、日本人の母語である日本語を言霊による神格化とともに、植民地人に植えつけると決めた。だが、両社会を混乱させた日本の為政者・言語学者たちの責任は、決して消滅するものではない。敗戦後の彼らの「自己責任」の行方はどうなったか。

第１節　アメリカ英語への隷従

１．反省より隷従

ルース・ベネディクトは『菊と刀』の最後の章で、昨日まで敵国であったはずのアメリカとアメリカ人に対して日本人が掌を返すように乗っかり隷従するという態度を、あっけにとられて述べている。台湾での日本語普及政策の失敗後の無反省な身のかわし方と同じ観点が、戦後日本の英語教育の中にはっきりと表れていると筆者はみている。日本人は代々神の国という意識が根強く、他国に目立ちたい国民であるだけに、失敗時には散らかした

ままそそくさと尻尾を巻いて大局に乗り移り、根底的に反省を嫌悪し、うやむやにする尊大な国民だと国際的に評価されても異議建てできない。

台湾の人たちに日本への隷従だけでなく畏敬の念までをも強制してきた日本人が、今度は逆に自ら進んでアメリカとアメリカ英語への憧憬と隷従にすり替わる。アメリカのありがたい国体、物質文明への羨望、戦後から始まる日本の「アメリカ英語」普及政策の観点は、台湾総督中川健蔵のことばを借りて言い換えれば「どうしても日本の住民がアメリカ精神をもたなければならん、それにはどうしてもアメリカ英語が必要である」と。その理由は「アメリカを離れてアメリカに隷従する日本は成立せず、アメリカ人を離れて日本人はない」となる。

そこで言語学者、英語学者たちは指図されるまでもなく、同化のため競って今度はアメリカ英語の中にアメリカの精神と言霊を自ら探し求め、その複雑さを何千もの論文によって英語独特の発音、リズム、抑揚や文法の中に見出した。英語学者・教育者たちはまるで実験室の鳩のようにこぞってそれをいかに緻密に威厳づけようかと日夜研究努力を重ね、その“成果”を日本国民の精神にまで植え付けることを通して、アメリカ精神に近づかせようとしてきた。

また、台湾での政策では国語の威嚇と彼ら母語使用を禁止することで、日本民族の使命を達成させることができると主張したように、勝利国アメリカにはハレとしての「アメリカ英語」の優秀性の自己誇張と、日本国民が100年をかけて造り上げた「ニホン英語」がケガレとして排除され、タブーとなってつながっている。そうした彼らが競い合って著してきた“言霊発音･言霊文法論文”の根底にある言語理論は、どんな観点のもとにあるのか。

２．アメリカ英語の言霊信仰

現代の日本における英語教育では、アメリカ英語の中身をより効果的にするための威厳づけとして、「言霊信仰の観点」が引き続いて利用され、言霊に代わる権威・威光としてアメリカ英語を母語のまま模倣させ、敬語に代わる英語独特の難解な音声と文法を、より回りくどく精密に、有難く、畏れをもたせて教えることになったと筆者は見ている。

(1)アメリカ英語を母語として模倣させる

敗戦後無一文となった日本は今度は自発的にアメリカの疑似植民地となり、日本政府は、敗戦直後から旧文部省、現文科省のもとで、台湾で強制した日本語を今度は母語としての英米英語(現在では主にアメリカ英語のため以下アメリカ英語と記す)をそのまま摩り替え、矛先を日本人、幼気な子どもたちにさえ向けて強制するようになった。

文科省の英語科指導要領によると、英米人でさえ完璧には習得できないアメリカ英語を、国際理解(相互の国際“理解”のためだからこそ、真似事ではいけないのだが)という名のもとに、西洋の言語・文化とは元来何のゆかりもない日本人の若者に、母語としてのアメ

リカ英語を「正しく」真似させ、完璧に学ぶようにと指摘する。この原因となったのが戦後増えた英米留学者である。彼らは努力に努力を重ねて、英語の方言であろうと、はやりことばであろうが、カッコいいネイティブたちのイディオレクト（個人語）からゼスチァまでそっくりそのまま真似て持ち帰り、これぞ英語（の言霊）だと自慢げに教壇で使ってきた。この“魔力”が彼らの洋行帰りの“勲章”であったし、それを幼気な子どもたちに今も得意気に押し付ける。

こうして台湾統治当時の総督府随員伊沢修二が台湾の人々を「日本国民に育て上げる」といったように、皮肉にも今度は文部（科学）省と日本人言語学者と教育者が共にアメリカ人の母語であるアメリカ英語を、そっくりそのまま日本人の若者に強制する立場となった。上田万年の彼なりの努力と深い悔恨は、今の時代にもこうして反省されることなく、再び日本人には日本人の母語と国際語としてのニホン英語があり、アメリカ人にはアメリカ人の母語があるという事実は捻じ曲げられ、棚に上がったままである。悪因縁というほかない。

(2) 言霊敬語に代わるもの

日本の敬語、中でも謙譲語と尊敬語は封建時代のおぞましい日本文化の負の遺物であり、筆者はこれを「負の世界文化遺産」と呼ぶ。日本人でも一生かかってもこれらはマスターできない。だからこそ有難いのであろう。詩人の佐藤春夫に至っては、敬語は後からでは取り返しがつかないからと、初級の段階から完璧に使えるようにと植民地人に強制し、少しの間違いも「不敬」として罰した。

さて、日本の若者にアメリカ英語を教えるにあたって、封建主義の厳しい日本ほどには発達していないアメリカ英語の、日本の言霊や敬語に代わるものとして威厳を持たせるためには、何がふさわしいか。そこで言語学者・英語学者たちは英語を神格化するために、日本語と英語の共通点よりもむしろ相違点、日本語には現れない英米文化を匂わせる日本人にとっては簡単には近づけない、見たところ深淵そうで複雑な発音・文法、たとえば日本語なら５つだが英語では13もの母音やr/l、b/vといった子音の区別の発音、それに理屈では納得できない三単現や複数形のs、理屈では分かっても一生身につかない冠詞、物質名詞、語順のような、一般の日本人が学ぶには文化の違いにより不必要なものでありながら、この厳密すぎて厄介な文法を、厄介だからこそ言霊や敬語のような、聖書の「初めに言葉ありき」から、神の造り賜うた神聖で畏れ多い存在へと置き換えて恭しく学習の、しかも初歩の段階から植えつけようとしてきた。これでやっと筆者の長い間の疑問が解けた。これらのとるに足らないルールこそ英語教育の威厳のための符牒であり、今もかれらの大切な“商売道具”なのである。

こうして、日英語には99%の共通点があるというのにたった１%の相違点、それを身に

つけるには一生を棒に振りそうな複雑な英語のルールを初級のクラスから課し、これぞ英語の真髄と、「上手になればアメリカの上流社会に認められるのも夢でもない」と信じさせ、これができない学習者は「英語の落ちこぼれ」とみなした。苦しめるために教える。これでは英語学習が楽しいはずがない。事実、筆者はこの神格化したルールを覚えるのに上級者でさえ一生を棒に振る可能性と、これらのルールがなくても95%通じることを証明（末延 2012）した。

人は自分の母語でさえ文法通りに使うには難しいというのに、他人の母語の微細を強制させられた時、習慣化するものではないため、本能的に耐えきれない拒絶反応を起こし、その拒絶反応は学習のたびにさえ新奇なものとして現れ、止むことなく、やがては精神に大きな害を及ぼすものであるという仮説（末延 1986, 1992）を筆者は警告し続けてきた。

(3) 日本の言語学者・英語学者の観点

日本語普及政策という日本国を挙げての言語学・言語教育学的大実験の結果、日本の言語学者たちは言語学における大発見をした、と石教授は提言してくれている。「皮肉なことに、武器や戦艦、大砲で外国を脅し、植民地政策としての日本語普及という大事業に遭遇して初めて、日本人は、鏡の前に立ち、自国の日本語がとてつもない厄介な言語であることを大発見した。（p. 192）」というのである。

これほどの強制力を以って多大な精神的苦痛を与え続け、言語学的な大発見をしたからには、母語というものは決して二度とそのまま他人に強要するべきものではないということが日本人言語学者たちには重々分かったはずである。ところがことばは使い手の身になって教えるという基本的な反省、これさえすれば政策ではいかに馬鹿らしい教え方をしてきたのかがはっきりと納得できるというものを、その反省がないから、これを何としたことか“我が子”にそっくりそのまま押し付けた。かつて文部次事務官森田孝が「決して単なる伝達や交流のための俗っぽい道具になってはならない」と指示したように、彼らは平気でアメリカ英語を善かれと判断してそのまま母語として完璧な模倣を若者に押し付けている。

こうした「完璧」の裏には「神がことばを造った」（だから寸分間違ってはならない）という聖書のことばをもとに生まれた西洋流の言語学を基礎に、彼らは申し合わせたようにアメリカ英語の威厳、英語の発音や文法の厳しさをさらに強調する、アメリカへの同化のための英語賛美論文を競って書き始めた。その数多の論文や著書の根底にある言語理論はどんな観点のもとにあるか。

「世間」研究で著名な阿部謹也（p. 38）は「欧米の社会は理想とみなされ、実情の分析が十分に行われず、わが国の社会の分析も不十分なままに放置される傾向があった。わが国の知識人は欧米の社会を賛美していれば仕事が果たせるという状況であった。」という。

石はいみじくも政策の実行当時「総力戦の時流の中で日本語の優秀性を証明しようとした『研究』は洪水のように現れていたが、それらはしょせん紙の上の談義に過ぎなかった」という。そしてこの“研究”が日本語の難しさをかえって際立たせる結果となり、学ばされる側に大きな障害となったという。

これらの研究はかつて文部省が出版した『国体の本義』のアメリカ版として、アメリカ英語への絶対服従を想起させるとともに、台湾の日本語普及政策で実施された言霊や敬語の使用による神格化と同じことを、彼らはこの21世紀にアメリカ英語の中に甦らせたのであり、その魔力の完璧さを証明するために日夜“研究”を重ねるのである。こうして歴史は繰り返す。

その内容といえばたとえば2012年10月16日付け*The Daily Yomiuri* の「読者のQA」欄に*as best you can* と*as best as you can* の違いを教えてほしいという質問を例にとる。日本では最も著名と思われる英文法家は、完璧な答えを導き出すためのありったけの証拠を、新聞紙のほぼ半分以上にわたって記している。要約すると①前者が後者より古いだろう、②as best as you can はas best you canとas well as you canが合体したものかもしれないという。

ちなみに筆者の解答ではニホン英語の観点に立てば、「単に『等しい』を意義素とするasが再び加わることによってわかりやすさが強調され、かつ丁寧になり、それは聞き手、読み手への心遣いの現れとなる。ことばは丁寧に越したことはない。それだけのこと。」と２行半で答えるだろう。第一、一般の質問者がそれ以上の説明を望んでいるとは思えない。

以上のようにして、言語学者たちは多くのアメリカ英語賛美の論文を、国外ならともかくほとんどは国内で、しかも日本語で発表することに情熱をかけてきた。阿部は日本の人文系（語学学者と思える）学者の研究成果を評して「いったい誰のために書かれたものなのだろうか。学者同士の間の了解のために書かれているとしか思えないのである。少なくとも生活現場の事情を踏まえて書かれてはいないことだけは確かである。（p. 55）」と述べているように、それで言語学者・英語教育者としての「自己責任」を果たしているといえるだろうか。

彼らはこれほどに“完璧”な論文を書いて英語教育の発展に寄与しているのだから、英語ができないのは学習者の自己責任だと確信している。日本の３千万人の若者たちが、毎日学校で母語としてのアメリカ英語を完璧に学ぶようにと苦しめられているさなかに、軽く５千名を越える世界最大の巨大学者集団ともいえる日本の英語文法学者・研究者たちの殆どが、後述する「ニホン英語」の撲滅には意欲を燃やす。中には我が子も孫もいるだろう。阿部はさらに彼らは「わが国の現状をいかに改善すべきかということには関心がなく、

欧米とわが国の距離をきちんと計ろうとしていない。…欧米の事情の紹介で事足れりとしているからである。(p. 40)」という。

もし良心があるのなら、今こそ言語学者が言語学的にも残酷な現在の英語教育のあり方に向かって渾身の怒りを燃やさなくてはならないのではないか。日本人に適した英語の観点を定め、外部の雑音にひるまず改革に乗り出すことが、ことばを専門とする人間の「自己責任」であり使命ではないか。そんな中でただ学習者たちのニホン英語を、何ゆえに汚らわしいものとして撥ねつけるのか。彼らの言語理論の根底にあるものはどんな観点のもとにあるのかをいよいよ突き止めたくなる。子どもたちは十年もそれ以上も使ってきた母語の中に、いきなり紛れ込んできた「母語としてのアメリカ英語」を、そっくりそのまま純粋に心身に溶け込ませるような余地はない。３～５歳を超えると人間は誰しも他の母語を完全には受け入れないという科学的根拠（Asher 1969）があるのだから、すでに10歳を超える彼らにはニホン英語しかないし、それで十分通じる。それを徹底的に侮辱し、完璧なアメリカ英語を根付かせようとする教育は許されない。

第２節　ニホン英語と英語教育

１．ニホン英語とは

今ここでニホン英語とは何かを少し整理しておかねばならない。ニホン英語は日本人にとって世界へ向けての第二の母語とでもいうべきものである。日本では目の敵にされてきたが、世界で認められる64以上の英語変種の一つとしてニホン英語は国際的に認められている（末延 1991）。ことばは所詮記号だといわれながらも、母語にはこれほど深い思い入れがあるように、ニホン英語にもそれがいえる。ニホン英語は日本人が100年にもわたって、自分たちで育み醸造してきた世界へ向けての第二の母語である。筆者が提唱してきた *Open Japanese* がそれである。日本の英語教育の範疇では言語学者・英語教育者たちの立場から、教育の現場では申し合わされたかのように敵視されてきた。それは日英語の相違点ばかりを強調したかれらの日常の英語テストの出題内容と採点の厳しさを見れば一目でわかる。

日本ではニホン英語とその通じ率（intelligibility）を研究する人は0.0001%にも満たない。逆に日本では英米文学をはじめ細かい語や文を比較をさせて、緻密な音声や意味の違いを研究する人がほとんどといってよい。彼らは意味が合っていても文法（たとえば三単現のｓの付け忘れ）が間違っていれば容赦なく罰点、しかも10点満点でも多くの教師は０点にするほどに神経質である（末延 1991）。意味よりも自分たちの“研究”の大切な素材である「英文法」のルールの方が大事だからである。

彼らの多くは英米に留学し、英語を神の創造した尊い神聖な言語と信じ、それを犯すニ

ホン英語を、使うに堪えられない低級な俗物と断定する。この傾向はたとえばアメリカにピッタリあった26.5cmの靴（アメリカ英語）でなければいけないか、それとも使用に耐える程度の大きさのスリッパ（ニホン英語）でいいか、ことばという高邁な夜空を顕微鏡で見るか望遠鏡で見るか、という観点の違いにたとえられよう。日本の言語学には言語の巨視的な観点が極度に欠けている。

台湾統治時代にもニホン英語のような発想があったのでそれを紹介する。当時松川平八は「満州カナ」を媒介として日本語と満語のあいだの「協和語」として人為的にピジン語を作り出そうとした。満州国大同学院の曾教授は「カタカナは国宝とも言うべきスグレタ文字であるから、これをゼヒ採用されよう（p. 74）」とすすめたが、皇国のことばをくずれた協和語として使う者として当局から厳しく糾弾された。これは先輩たちが残した言語遺産としてのニホン英語を排斥されるという非情さに通じる。

２．恥辱感・恥の感覚を植え付け、罰点を与える

想い起せば、台湾では植民地人が日本語を使わないと権力を以って公職につかせず、給与も日本語能力に応じて支払うという手段をとってきた。日本語力テストを行い賞を与える一方、恥辱感を与える。しかし彼らは汽車やバスなどで現地語を使うと下車させられるだけで済んだが、今の日本の学校で義務教育の元では下車さえできない。ニホン英語を使うと罰点が与えられ、その成績が一生を左右する。ちなみに政策の中で山東省脅威に訓練所教官太田義一の植民地人の使う日本語を、次のような目で眺めている。

「…彼らの満足するに足る日本語の程度といふものは、極めて速成的な低級なものであり、その低級な日本語が最大限に、彼らの個人的物質的利益の為に利用せられ、街々に氾濫するのである。東亜の公用語、共通語とは何と低級な下品な言語であることか。」

これこそ現今の英語学者や教員たちが学習者を見る目と同じである。これは５年ほどアメリカに留学して帰ってきたという割りには完全なニホン英語のある言語学教授の、授業で学生たちに怒鳴りつけた言葉である。

「君たちのニホン英語は、本場のアメリカで磨いてきた俺の英語の耳を腐らせる。ケガレるから二度としゃべるな！」

こうして英語学者・教育者たちは、崇拝すべきアメリカ英語に対極するニホン英語を忌むべき対象として攻撃する。まさに当時の報知新聞社の柞木田竜善のことばを借りれば、「彼らの持っているニホン英語を焼いてしまうということがよい」という世界である。国家がニホン英語を使うほぼすべての学習者にたいして、同じくほぼニホン英語を使う全国の英語教師を総機動し、アメリカ英語への同化政策のために70年にわたって彼らに集中的にバツ点を与え、競争心をあおることで恥の感覚を植え付け、言語差別の原因を作ってきた。さらに現場では教師あるいは生徒同士で誹謗させ合い、恥の感覚を与え合って競わせ

る。減点主義、完璧な英米英語でなければ０点という共通の理解のもとで、日々のテスト、定期テスト、実力テスト、アチーブメント・テスト、センター試験などで当然のように罰点を与え、若者の将来の進路に多大な影響を与えてきた。このように見る時、日本の言語学の根底には元来論理的には説明のつかない、謎めいた日本古来の言霊の思想が今に繋がって滔々（とうとう）と流れているといえるのではないか。

思い返せば威厳のための言霊に加えて敬語の源は、古くは中国から『論語』を通じて受け売りされたものである。朱子学の伝来とともに封建時代の為政者・武士たちは、これほど好都合なものはないとこぞって受け入れ、またたく間に差別の象徴、特権として高く評価し、同時に身分の低い者たちにこれを強制し、自分たちの身分と精神生活とを一段と豊かに守るための必需品となった。こうして封建主義の観点からことばを見れば、身分の低い者が目上に対してこれらの語を正しく使わない場合、それらすべて「穢れ」た不正、タブーのことばと罵られ、身分が低いうえに畏くもことばを不正に使ったという二重の理由で、それ相応の厳しい処罰がなされてきたのである。こうして日本語を宗主国家語にまで出世させることとなってしまった過去の先例は、現代日本の英語教育にしっかりと根を下ろしていることがわかる。石剛の次のことばは我々英語教師にずっしりと重くのしかかってくる。

「標準語教育の強制、方言撲滅運動、話し言葉への差別、方言を母語とする人に恥の感覚を植え付けようとした国家的努力、敬語の用語、言語の国家的規範の整備、文法の制定を通して言語の統一を図るなど、こういう国家主義のにおいが強い日本の言語学の風土は、日本の植民地での言語政策にも投影している。（p. 155）」

３．意味が通じる度合いより、文法的かを重視

日本のたいていの言語学者たちの言語に対する観点は、言語の本来あるべき姿と根本的に違っている。「言語学が科学であるか否かにかかわらず、意味こそがその固有の対象であるのは確かなこと」であると田中（2003 p. 141）がいみじくも述べているように、「意味」は言語の生命にも例えられる。「意味」の伝達に関しては、近代言語学では本来は恣意的であるはずの言語の性格を、より“科学的”に研究しようとするあまりに、言語で最も大切な「意味」を二の次、三の次にし、あるいは無視するという驚くべき傾向がある。“科学信奉”に負けたのだ。「言語学の死」と例えてもいい致命的な学問の堕落である。

近代言語学が自分たちの都合、（つまり自分自身がどこに生を置いていて、自分の名前さえ“科学的”に説明がつくかどうかも分からないで「科学的」に説明がつくかどうかのためには、）たとえ言語にとって最も重要な「意味」さえも邪魔ものにし持て余し、ついにはブルームフィールドの「意味からの逃避」に始まって、チョムスキーの場合は「変形による意味の消去」だけでなく、「心」の消去、言語の生まれる元となった「社会」とのか

かわりさえ平然と消去した。彼らの言語観、言語理論の根底にある観点は何か。そこには人間としての「自己責任」が伴うのか。

こうした言語学の近年の動向について田中（1986）は「…近代の科学的な言語学の確立は、ことばを存在せしめている社会と、そこでことばを話す、意志を持った人間を、ことばそのものから排除することによって可能になったのである。…その間に国家と権力だけは意図をもって言語と、時にはその理論までをも操作しているのである。…言語学が一層高度に専門化し、発展すればするほど、人々は自ら言語への根源的な問いを発する道を閉ざされ、すべては考えぬ専門家にまかされる。」と述べる。

次元が違うが、英米のネイティブ英語を唯一の規範とする日本のほとんどの言語学者や英語学者たちによって、たとえばrice/lice, butter/batterやroast lamb/lost lambのような、「料理」という条件下では通常の人間の頭脳なら誰でも推理でき、訂正できる発音の相違と文法の不正確さを侮蔑し、吹聴してきた。しかし「意味」に関しては文科省が一番模範とするアメリカ英語の国際的な通じ率が55%であるというのに、ニホン英語は78%から95%にわたって意味が通じることを筆者は証明した（末延 1986 - 7 , 2012）のだが、それでも文法と発音がネイティブ英語と遊離しているという彼らの偏見から罰点となる。彼らにとってはアメリカ英語へと学習者を「同化」させるためには「意味」など通じなくても何のことはない。逆にニホン英語は、かえって通じすぎるがゆえに忌々しい、「カッコよくない」というだけのものである。

４．アメリカ英語の舞い上がり現象

台湾の日本語普及政策では、日本語の威厳を強調しすぎてしまうと威力の方が“出世”しすぎて独り歩きし、宙に浮いて舞い上がってしまった。同じように、英語教育も言霊に伴って音声、文法、それに英米人特有の日々の生活の単なる思いつきから生産された何十万という慣用句が、そして英米の数十倍といわれる５千名を数える日本の英語学者たちの、言語の程度を度外視した英語言霊論文がアメリカ英語を舞い上げている。そして言語の観点を、人間を相手にするのではなく“英語学のための英語”にしてしまった。文法的であること、難しいルールを覚えることが英語教育で最優先され、文法家のための英語教育、通じなくても文法が大事という風潮を作り上げた。

こうしてアメリカ英語と自分たちのステイタス・シンボルとしての発音や文法ルールの格上げがなされて行く一方で、同化のためにニホン英語をすべて抹殺、アイデンティティを持たせない英語教育の観点が先に立つ英語教育の不気味さ､恐ろしさが根強く鎮座する。そうした彼らの言語学・言語教育学の根底にある言語理論はどんなものか。

こうして創り上げた彼らの「アメリカ文化崇拝志向」の影響が、強国アメリカに否応なく畏敬の念を増幅させ、そうした傾向に自然と憧れ、なびく若者たちがいかに多くなって

きたか。筆者はアジア圏で日本語と英語を教えてきたが、誰ひとりとしてそれらの言語を「憧れの言語」として学んでいる人などいない。それどころか彼らはネイティブの分りにくいうえに速いスピードのアメリカ英語を堂々と非難するだけでは収まらない。中国のある大学の英語クラスではネイティブ英語を鼻にかけ、学生たちにはさっぱり判らないような早口で発音をして喚き散らし惑わす英語のネイティブの教員を退職に追い込むのを目撃した（末延 2010）。しかし日本ではアメリカ英語がまるで宗主国家語へと向かい、アメリカ英語同化政策の達成に向けて、ことばのホロコーストが進行する。

５．ことばの悪用―ヘイト・ワードの氾濫

日本人の言語観を読み解くにあたって、石（p. 15）は「組織的、かつ大規模な日本語普及政策、言語統制が行われ、学校教育をはじめ、法律用語や公用語の領域、軍隊用語などの面で（暴力的、強制的に、巧妙に）計画的に日本語の普及が行われたという歴然とした事実がある。これが軍事的支配と深いかかわりがある。これが戦時下における日本人の日本的文化観、世界観である。」という。

ところで戦時下から70年が過ぎたが、今、日本の親は何を願ってわが子に名前をつけるだろうか。健康、賢、美、和…と様々な願いを名前に託す。同じように政治家は世界の人々の平和と安全を願って自分の政策を名づけるだろうか。そうした人たちはどんな観点のもとにことばを使っているのだろうか。敗戦直後、大人の仕出かした戦災で親を失った児童を「浮浪児」と呼び、動物にたとえて「浮浪児狩り」と呼んだように、「障害者」、老人の未来を封鎖させる「“後期”高齢者」を生み出し、死の商人たちは兵器輸出を「防衛装備移転」と、このごろの政治家たちは戦争準備の危険な法案を「安全保障法制」等々…誰の目にもこの恐ろしいことばの中に、すでに核戦争という対象を観点としてしっかりと埋め込んでいる。元来平和主義者の間で共通の「積極的平和主義」という人類の神聖な平和の願いの表現を、この国の首長は真逆の意に茶化して使う。彼らの政策の観点があからさまに残虐なことばを軽々しく生み出して争いを煽るところから、「観点がこうしたことばを生み出す」と言い換えることができよう。

こうしたことばが最近とみに多く見られるようになってきた。造語したり様々な解釈をするのは自由だがそこに責任が伴う。政治家ならなおさらだ。ところが憲法解釈も武器の使用を禁ずる憲法９条の「戦争放棄」から、1969年には「限度を超えることがない兵器」ならばと“控えめに”認め、1998年には「必要最小限度のものにとどまるならば」と核兵器さえ認め、2016年にはついに憲法法制局長官は国会で「核兵器の保有も使用も『憲法上禁じられていない』」と胸を張って読み上げた。言語学的に見ても観点の軸の大揺れする、人間の弱さと恐ろしさをまざまざと見せつける。

こうして為政者たちは言葉の魔術師のように“大切な国民の安全のためを思うからこそ、

いつかは分ってもらえる”、と“善かれ主義”のもとで「中国の脅威」などと早めに敵対国を想定して戦争の脅威を煽り、9条を徐々に蝕み、かれらの祖父が念願した“今度こそ”が可能な憲法へと舵を向ける。そしてとうとう現政権は平和を願う国民と世界を尻目に、世界をリードするはずの日本が本性を表わし、「核兵器禁止条約決議」に反対という、矛盾した世界唯一の核被害国日本を造りだした。一つ狂えば地球を破滅させる力をもつ彼らの政治理論の根底にある観点は何か。そこにはみじんたりとも「自己責任」はあるのか。

６．センター試験は「言語統制」

厄介なものが英語のセンター試験であって、これではいわばアメリカ英語の憲法の試験、“踏み絵”である。中には長文問題のように英米文学偏向が消え、読むに値する内容が増えた一面もあるが、英米文化の所産としての英語の文法事項が年々増加するばかりかそれらが一つ一つさらに厳密になり、今では20～30万を数える途方もない種類の慣用句・動詞句が、何の整理もなく入試のターゲットになっている。こうした知識の片鱗を、国家的な規模の共通試験やセンター試験や国公立大学の入学試験に出題する。その解答はただ一つ。意味としては十分通じながらも、アメリカ英語から寸分でもずれていたり「ニホン英語」だと判定すれば、０点とされる。日本の英語教育はこのように、ぐうの根も出ないほどに完全な言語統制の中にありながらだれも異論を唱えないのは、言語学者・英語教育者たちが皆同じ「同化への道」に向かっているからである。しかしそうした同化教育の前に、まず自分たち自身の英語が「ニホン英語」でないことを証明すべきだ。

このようにアメリカ英語は彼らにとって「ハレ」の英語としてその目標とし、その裏ではニホン英語は「ケ」として英語教育の最大の撲滅目標、タブーとなっている。教養ある多くの英米人でさえ時には困難でありながら、必ず出題される仮定法過去完了の問題などが威厳を発揮している。自由のないミツバチの言語の学習に匹敵する。

実験もしないままにニホン英語はすべて通じないからと罰点を科す文科省を、筆者は半世紀、鋭く追及してきた。例えば、I don’t know who <u>he is</u>. は一般的な英米英語であるが、中国英語をはじめ国際的にはI don’t know who <u>is he</u>.も認められ、もちろん世界中で当然認められているというのに、日本ではセンター試験を筆頭に多くの入試では、これらの違いを毎回わざわざ設問の主要ターゲットとして出題する。語順問題にしても、単語をどんな順序に並べても人間の頭脳は大抵は意味が理解できるようにできている（末延 2014）ことに無知である。

センター試験はニホン英語<u>も</u>考慮するどころか、ニホン英語や独自の国際英語<u>を</u>この世から撲滅するための試験になっている。大空を見上げるような寛大であるはずの人類の平和で陽気な生き方のための言語が、同化政策の先端を行くために今や世界中の人々が目指す国際的簡易化と多様化傾向から遠く離れて、いわゆる“有識者団体”といわれる言語学

者や英語学者が威厳を指向する英語は、単なる知識の切れ端の集まりと堕し、顕微鏡の世界のように増々微細化されて行く。国際語としての英語を世界的に大らかな感覚で出題し、正答の幅をさらに広く開放するべきである。センター試験が難問の数を増やせば増やすほど、単にそれを食い物にする受験組織である英語産業が潤うという、彼らに乗っかった悪循環の試験制度だと呼ばれても致し方ない。このような言語教育を犯す根底にある言語理論は、いったいどんな観点のもとにあるのか。

第３節　変革

１．若者たちの抵抗

さて台湾植民地の教養の高い人民たちは、日本語の模倣・同化政策に対して次第に屈辱感を覚え、アイデンティティの危惧を本能的に認知し、どのような強制にも屈しない強い精神を持っていた。言霊などに騙されることなく、言葉を所有する本来の人間として本能的、直観的に言語の最も基本的な観点を知っていた。だが現代の日本人の英語教育政策には、教師も学習者たちもそれに反抗するどころか、むしろあこがれの対象としてアメリカ英語を崇拝してきたことで余計に悲惨である。その結果、予想通り最近のいわゆる“18歳選挙”の結果が示すように、多くの若者たちはアメリカ英語漬けの魔力と現政府が煽る戦争の脅威を通じて、逆に戦争の道につながる危険な波に乗ってしまった。笛吹き男の後を追ったブレーメンの子どもたちのように、この国の若者たちのアイデンティティも消え去る運命にあるのだろうか。

ところが最近日本でアメリカ英語の完璧な模倣英語学習に、疑問を抱く日本の若者が少しづつ増加してきた。授業の中以外にはほとんど自分の英語の通じ率を試す環境にはなかったが、賢明な彼らはやっと「アメリカ英語以外は通じない」というデマゴギーの正体を見抜き始めた。言霊の正体を知った台湾人たちのように、彼らはアメリカ英語もどこにでもある64種にも上る英語のうちの単なる一種で、しかもそれは世界で最も通じにくい英語だと見破った。世界を相手に日常英語を平凡にコミュニケーションの道具として使ってきた人々の間でも、ニホン英語が十分に通じてきたことに確信を持っていて、通じないという英語学者や英語の先生方のことばに疑問を抱いてきたのである。猿真似のむなしさを見破る日本の英語学習者たちも、ごく一部とはいえ確実に育っている。

２．若者たちの声

筆者が今まで百回近く約１万５千人に対して国内外で行ってきた『ニホン英語は世界で通じる』と題した講演のうち、某県内の約2,500名の中・高・大学生へのアンケートの大まかな結果を簡単にまとめると以下のとおりであるが、そうした彼らの根底にある言語観はどんな観点のもとにあるのか。

(1)自信を取り戻した

・私は今までは自分の話す英語が嫌いで嫌いで仕方がなかったです。なぜなら学校の先生が発音を指摘するからです。私自身話せればいいじゃないかと反発していたから人前で話すことが苦手でした。日本人としてアジア人として、堂々と自信を持って英語が話せそうです。

・僕は特に英語が嫌いでした。高校の時英語の発音のことを厳しく注意され僕も何とか英米人のような発音で英語を喋ろうと努力しましたが、これからは意味の伝達に力を入れ堂々と英語を話していこうと思います。

・小学生の時から英会話教室で学んできましたが、（高校生になっても）自分の英語の自信が持てず、英語を「こわい」「恥ずかしい」と思うようになってほとんど話せなくなりました。私は将来通訳士になりたかったのですが、恐怖心が消えず諦めていました。でも「また通訳士に目指してみようかな」と思えました。

・生きた英語とは流暢な英語を意味することではなかったのです。自分の伝えたいという思いを、英語という言葉の中にどれだけ強く、そしてどれだけ正確に込められるかということだったのです。こんな簡単なことにも気づかず、一生英米英語というものにとらわれて相手に思いを伝えられないもどかしさを感じていました。

・今まで皆の前で自分のへたくそな英語を話す事はこの上なく恥ずかしいことで、何より嫌だった。言葉と言う最も高度な信号は高度が故に精確でなければいけないと思っていた。今までは文法に忠実に従い正しい舌の巻き方まで教わり、それが英語でそれが言葉だと思っていた。問題を解くにあたっては大切な能力なのだが、実際にそれが会話として伝わらないなら意味は全くない。とにかく英語を話すにあたっては羞恥心を完全に取り除き、思い切って自分自身の英語で伝えていくことが何より大切であるということを学ぶことができた。このことは言葉だけでなくすべてのことに言えることであり、そうすることでより一層日本人としての生きていく幅が広がると思う。

(2)世界の英語教育の実状が分かった

・先生の講演をきいていなかったら私はアメリカン・イングリッシュを強制されることに何の抵抗もなく、米国の思うままに操られていたところでした。世界観も少し変わりました。

・日本人以外の国の人々が自国独自の英語を堂々と話しているという事を聞いたとき感銘しました。日本人はグループ社会、つまり自分と同じ考えを持つ人々でグループを作り、皆あの人がやるなら私もといった具合で、英米の発音だけが正しいと思い込み、自分というものが欠けていた人種だと思います。

・日本人やインド人が英語を話している映像を見せられた時驚きました。確かに欧米の人

たちよりも単語の発音がハッキリしていて聴きやすく、また会話もなめらかに話していたのです。

・私はこれからはグローバル社会になるから英語は絶対に必要だなと思っていました。しかしその思いと同時に欧米人たちが話すように話せるのかと疑問を持っていました。私の不安を吹き飛ばしてくれました。

・真似の虚しさ、今まで自分が操られていたことがわかった。

(3)発想の転換

・ことばは完璧ではなく、柔軟性があるということが分かった。

・私たちは英語を学ぶけど英語を母国語とする人はいろんな国の人が話す英語を理解できるように学んでも欲しいとも思いました。

・第一に意思を伝えるということに重きを置く英語の教育が必要だということ、第二に日本の英語教育が外人のネイティブに近づけようと意識しすぎていること、第三にさらにそのことに気づかない人が多くいるということで、その考えが広まっていくといいなぁと思いました。

以上のような感想がいくつかを占めた。ニホン英語は通じないという無責任な英語教師たちのデマに、今までどれだけ多くの学習者たちが自分の夢を摘みとられてきたか。彼らは教師に媚びる点数漬けの英語好きの学生たちより、言語に対するしっかりした観点もない英語教師たちよりも、人間として本質的にずっと賢明で、何事にも外部の強制に屈しない強い精神を持っている。彼らはたとえ一時的にも日本人としての自分の本性を隠して、アメリカ人のように振舞わされる英語教育のあり方に我慢ならなかったのである。

全アンケートの中にひときわ記憶に残る回答が一つあった。“一時間半も話を聞かされたが、今の僕はどんなにもがいても今の授業について行くしかない。…でないと自分は取り残されるということがこの講演者には判っていない。しかし社会人になったらその日から、ニホン英語の学習に専念する。”と書いてあった。実は今まで行った現場の教師たちへのアンケートの回答の多くが、奇しくもこれに類するものだったことを付け加えておきたい。

第４節　言語偏見と先入観を切り捨てる

今まで見てきたように、言語の観点というものは、良くも悪しくも先祖から受け継いだものとして各自の精神構造の深淵に刷込まれ、あるいは知識の断片となって積み重なってゆく。しかし当然そのあいだには迷信や偏見が含まれる。近代言語学の創始者ソシュールは、言語の本質を悟り、真の言語学を打ち立てるために、今までの言語学の中に大きな位

置を占めてきた余計なほこり、世にいう規範文法、文献学の迷信、偏見、先入観といった通俗性を整理あるいは抹消することを指摘した。

コミュニケーションの道具としてのことばの大切な姿は、台湾での日本語政策と日本の英語教育の中に見られたように、多量の不要な付帯物によって覆い隠されたため、肝心の人々から使うことを敬遠されて舞い上がってしまった。言語教育学の立場からも、こうした取り巻きは一掃しなければならない。たとえば日本語であれば、文化の中で生じたとはいえ古来から長きにわたる言霊、封建主義時代に生まれた大げさな尊敬語、謙譲語といったアクセサリーを日本語からまず一掃する。

次元は違うものの、筆者はこれを拡大解釈して筆者なりに生涯の研究課題としてきたニホン英語の生成過程の研究に当たっても、言語にまつわるこうした余剰物の整理、抹消は必要であると考えてきた。たとえば英語国民の利己主義的・自民主義的な市場取引のセコさから生まれる数、物質名詞、権威づけのために生まれた差別用語、冠詞、right?で済む筈の数百種を数える付加疑問形、それに若者の単なる流行のカッコよさから偶然に生まれた三単現の－sの添加などに対する異常な執着、せこい表現形式の抹消、未整理の数十万句にも及ぶ個人特有の表現イディオム（これら無用の特殊なルールは言語分類学上俗語・隠語[たとえばうんち]に当たるもので、幼児が母親の注意を引くために言語学習時に好んで使う。どちらも疎ましいものとして同じレベル）に見られるような、そのイディオレクト（個人語、private language）の余計さは学習に大いに差し障る、ほおっておけば人の数ほど増えるという点では共通している（末延 2015）。それに日本人特有の英語という言語に対するこうした異常な“畏敬”の念、ニホン英語は通じないといった偏見と先入観の一掃である。

こうして日本人のみならず国際的にも負の文化特有の不必要なものを切り裂いていって最後に残ったものが、重要な役目としての情報のための基本的なことばとなり、英語の場合、その一例がすでに百年も前からニホン英語として熟成されてきており、今に至っている。

Ⅴ．結語

かつて日本軍は国を挙げて台湾の植民地人に日本人の母語である日本語を押し付け、彼らの母語を禁止した。ところが皮肉なことに、それと同じことが今日の日本で繰り返されていることが、実感として理解されていない。それこそが国家を挙げて若者にアメリカ英語を押し付け、ニホン英語を禁じているという現状である。日本が台湾で仕出かした無残な言語政策の負の歴史は、因果なことに現在はこうして自国で“復元”され、それは日本

の現代のアメリカ英語への同化へと向かう英語教育に見ることができる。これが残念なことに日本人の言語観、言語教育観となって浸みついており、それが政治に反映されている。決して政治からの反映ではない。なぜなら政治家も国民も我々英語教育者がそのように育ててきたのだから。

石は自著の締めくくりとして「政策を通して、日本人の外部世界に対する認識というもの、その人間観、文化観といったようなものが、日本人の精神史の一断面として露呈された。またそこに現れた言語観や言語思想も時代を鏡のようにうつしている。そしてこれらは今でも完全に過ぎ去ったものとはいいきれないだろう。」と述べているが、これが消し去られるどころか、今の日本の英語教育にまざまざと反映している。そして言語学が科学に負けたように、人間の理性、悟性、つまり思考能力さえもがアメリカ英語という言語教育を通じて、じわじわと戦争の世界に誘惑されつつある。そして人間の心一つ、ことば一つが真理であることを無視し、自己責任からの逃避がはじまっているというのが筆者の結論である。

１．観点の大切さ―再考

言語は社会の中で産み落とされたもので、親がなければ子がないように、社会がなければ言語はない。その中で言語は人々が助け合って、平和で陽気な生活を維持するためにある。言語の根底は「社会」に出発点を持つ。言語は互いに人間の「心」、意思を伝達し合うものであるから、当然「意味」が第一に大切である。言語をこのような観点に立って見れば、人間社会に健全な言語学が発達し、それは言語教育の発展にも貢献するはずである。

台湾での言語政策では、統治と被統治という二つの社会にあって、統治する側がそれぞれの「社会」の存在を顧みず強制的に支配した場合のように、両者が失敗に終わり、社会組織が崩壊した。では、言葉“本来”の姿を見ようと、たとえばひとりの天才が机上で考えたある言語理論が、理論構築上「社会」のような煩わしいものは除去して「社会と無関係」にし、さらに科学的に検証するという立場から実体の見えない「心」も、時には「意味」さえ消去するという大胆な原理から出発したとすれば、その言語理論は、それを支持する何万もの論文の知識的な断片が集まって専門用語で武装しようとも、単なる心ない断片の集まりでしかないことは誰の目にも明らかである。そうした言語理論の根底にある観点はどんなものか。その根底にある論理自体が社会から独立した頭の中で生まれたものであれば、仲間だけで通用しても、心ある社会では成り立たつわけがなく、あるとすれば戦場であろう。

もしそんなものを言語学理論とでも呼びたいというのであれば、それは社会も心も時にはことばの意味さえ消去したロボットの妄想による理論に基づいた「妄想言語学」と名付ければいい。妄想の中だけでなく上田万年のように、相手の社会や日本語の使い手の心も

無視して、ただひたすらにお上に傅(かしづ)くため、日本帝国の世界制覇のために、思ったことを現実にも実行し、自己責任をうやむやにするような言語学が許されるなら、それは言語以前の「嘘と追従」であり人間社会は成り立たなくなる。日本語普及政策ではこれが事実となった。ならば奇しくもこの言語理論は万年たちが台湾で実行したあの妄想と軌を一にするではないか。つまり、意味の伝達をさしおいて、ことだま信仰の押しつけによる心の不在、それに伴う反社会的行為といった共通点である。

こうした妄想の中の言語には社会も心も、時には意味さえもないのだから、言語学者・英語学者という名のもとにそんな言語理論を現実の社会に流布する人々は、社会も人の心をも無視し、自分の利益以外のことは無関心でいられる言語空論の上に立つ孤独者とその集団ということになる。

日本の英語学習者たちがそうした暗雲の中の言語観に彩られた英語教育に巻き込まれているかぎり、学習者の存在自身が見放されることになる。だがそんな言語学的観点を持っている言語学者や言語教育者も、それを信じて現場で教育をしている教師たちも、実際は「社会」に生活しているわけだから、彼らの「自己責任」と社会的責任は、台湾での政策のように国民にアメリカ英語を押し付け自分たちを擁護してくれる便利な日本政府、文科省に転嫁して、せっせとさらに難解なアメリカの威光を放つ言霊論文を書いて、子どもたちをどこまでも迷路に追い詰め、彼らの不完全な発音と文法を罵る一方で、アメリカ英語を天まで舞い上がらせることになってしまう。

ミツバチでさえ、彼らの言語はミツバチの社会生活に通用し、蜜を運んでくれるという、我々にとって有難い言語がある。人間の言語は人間の社会生活の中で個人はもちろん、社会が互いに心を込めて使い合うものである。それに引き換え日本の言語学者、英語教育学者たちの言語理論の根底にはどんな観点があるのか。彼らの多くが先述のようにかつて台湾の人たちに対して自己責任を放棄したと同じ政策で敗戦後70年、アメリカの言語・文化への同化のために「人間の心」も、「ことばの意味」も、「人間社会」をも邪魔ものとして消去するような言語理論に洗脳されているとすれば、今のように英語に苦しむ多くの子どもたちの心や社会さえも見捨てられ、消し去られて当然である。日本の言語学者や英語教育者たちが、こうした誤った観点からの英語教育による若者たちの苦しみに耳を貸さず、理解しようともしない無責任さを抱いているとすれば、こうした所にその源流を発しているからである。

２．無反省

台湾における日本語普及政策は一言で言えば、為政者・軍および言語学者たちが言語の観点の重要さを無視し、両国の友好のためでも人間相手でもなく、彼らに人間として自由のひとかけらもない働き蜂の言語の学習を強いておいてこっそり蜜を狙う、隷従を強いる

ものであった。敗戦後も反省することなく、日本政府と文科省、言語学者・英語関係者たちは、忠誠と隷従の矛先を天皇からアメリカに向け、言語政策の矛先を台湾人民から日本の若者に向けたにすぎない。日本の言語学者・英語教育者たちはいま、植民地で起こした“文化大革命”ともいえることばに対するまちがった観点が引き起こした日本語普及政策の残酷さの忌まわしい根を、何の反省もなくそのままそっくり英語教育の現場で若者に接ぎ木している。台湾他での日本語普及政策でのこれだけの犠牲を押し付けた大実験にしては、日本の為政者も言語学者も反省がない。

戦時下で日本軍がアジア圏で行った人体実験、細菌実験に勝るとも劣らない、精神面での残酷な大実験であったにもかかわらず、敗戦後70年の政府談話では「あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代も子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」と。祖父の「刷込み」の名代として犯した戦争責任を“ただやり方が悪かっただけ”と歴史事実を切断し、孫の代まで自己責任が及ばないよう責任自体を消滅させようとした。反省力もなく“善かれ主義”のもとで過去を消し、憲法を犯して「戦争放棄」を覆すことに躍起になる者が政治を握っているとすれば、無反省に輪をかけた言語道断と言わざるをえない。

数多の迷惑をかけたアジア圏の国々の人たちに対して「自己責任」をどこまで消し去れば気が済むのか。さらに英語という言語に対するまちがった観点への反省のない限り、我々も子孫も末代救われることはない。その証拠に我々の幼気な子どもたちはこの70年が過ぎても、大人たちの無反省のために今もなお重い宿命を背負って言霊英語に苦しんでいるではないか。ことばは心の叫びである。各々の人格がもっている根強い地方文化、さらに個々人の多様性、こうしたものを軽蔑したり無視した言語（外国語）教育者側と学習者側の行きつく処の横柄さと高慢さ、それにひきかえむごたらしさ、悲惨さは、東西の歴史の教えてくれるところである。

日本が行ったアジア各地での植民地での日本語普及政策は、世界でも稀な20世紀最大の恥ずべき言語教育実験の一つであった。まさに歴史は実験の結果である。ところがこの事実の詳細はこの70年、言語学、言語教授法に関する書籍の中にも論文にもお目にかかっていない。日本の言語界がこれを負の遺産として認識し、反芻、反省してこなかったために、私たちの子どもたちは70年も過ぎた今もなお、誰が何と言おうと“善かれ主義”のもとに、台湾での政策施行当時のままの観点と教授法で、アメリカ英語の完璧な模倣の強制のために、心身ともに多大の無駄な苦しみを強いられ、日々の心労が若者たちの周りをまるで亡霊のように纏わりついて、精神の髄の髄にまで冒されている。現代の英語教育の根本的な誤りを認識するためには、三代、四代どころか今後数代にわたって過去を謙虚に辿り反省する勇気と力を持つことである。アジア諸国との友好はもとより、日本が仕出かした過去

の戦争の苦い経験に反省に反省を重ねること、脚下照顧する以外には日本の言語学、英語教育は発展を見ることはない。

人は反省することで次の時代の土台にならなくてはいけない。反省がなければ今のように過去の誤りをそのままこれからも引き続けることになる。それにつけても、開国以来この国の言語学・言語教育は西洋の追従に走るあまり、何のための人生・言語かといえば、然るべき観点も目的も失った「利己的言語学のための言語観」に成り果て、彼らの鬱も飽和状態になっている。言語の観点そのものの研究と反省がなされてこなかったためであり、日本国民はもとより言語学、英語教育にとって実に不幸なことである。

謝辞：本稿は筆者が敬愛する言語学者田中克彦氏をはじめ、石剛氏の御著に大変お世話になった。筆者は言語教育学に関心を抱いてきたことから、日頃英語教育の中で感じてきた矛盾に満ちた英語教育法の実態をこれらの著書と重ね合わせることで、現在の異常な日本の英語教育の原因を明らかにさせてくれるための灯となった。紙面を借りて感謝申し上げたい。また文中の引用に当たって筆者の数々の独善的な解釈、未熟な誤解から生じる責任はすべて筆者にあることを書き添えたい。

参考文献

Asher, J.J.& Garcia, The Optimal Age to Learn a foreign Language, *The Modern Language Journal*, 53(5), 1969

小林英夫『一般言語学講義』岩波書店 1980

石剛『植民地支配と日本語』三元社 1993

――――『日本の植民地言語政策研究』明石書店 2005

将基面貴巳『言論抑圧 矢内原事件の構図』中央公論新社 2014

末延岑生『ことばの元を探る―知恵と文字の仕込み』神戸商科大学研究叢書LXXI 神戸商科大学学術研究会 2004.3

――――「ニホン英語」本名信行『アジアの英語』くろしお出版1991

――――『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書 平凡社 2010

――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（形態編）--アジア英語（*Open Asian*）を礎として」『芸術工学2012』神戸芸術工科大学2012またhttp://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.htmlで検索。

――――「日本人の英語―その形態的・統語的特徴」『人文論集』31-1 神戸商科大学学術研究会 1995.9. 末延岑生他、及び『英語学論説資料』第30号，論説資料保存会に転載。

――――「語彙の経済」『人文論集』神戸商科大学学術研究会 2002., 及び『英語学論説資料』40号-3，論説資料保存会2005-6. に転載。

――――「経営戦略を志向した英語教育―中国を事例として」『人文論集』第39巻 第1・2号 神戸商科大学学術研究会 2003.12., 及び『中国関係論説資料』第46号-4-上，論説資料保存会2006.2. に転載。

――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究―統語編（語順）」『人文論集』第48巻 兵庫県立大学 2013a，及び『英語学論説資料』論説資料保存会に転載。またnii.ac.jp にてmineo suenobu

で検索。
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究―音声編」『人文論集』第49巻 兵庫県立大学 2014, 及び『英語学論説資料』論説資料保存会 第48号「音韻論」の項に転載。またnii.ac.jp にてmineo suenobuで検索。
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究―統語編（時制）日本「アジア英語」学会 2013b
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究―歴史編（イギリス偏向の英語教育―第二次世界大戦前夜まで）」『人文論集』第50巻 兵庫県立大学 2015及び『英語学論説資料』第49号に転載。
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究―従米から屈米への日米外交」『人文論集』第51巻 兵庫県立大学 2016
Suenobu, M. *Errorology in English*. Yugetsu Shobo, 2002.11
――――*The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH Monograph Vol.LXXVI,Institute for Economic Business Administration Research, University of Hyogo 2006
Suenobu, M. et.al. Information Transmission of English by Japanese EFL Students and Native Speakers of English: A Comparative Study, *Working Paper*, No.136 The Institute of Economic Research, Kobe University of Commerce,1993. 及び『英語学論説資料』第30号-5 論説資料保存会に転載。
竹下直之「言語の道義性」1942
田中克彦『言語学とは何か』岩波新書 2003
――――「現代言語学の不幸」毎日新聞1987.3.27
時枝実記『国語学言論』1941
中川健蔵『国語運動』第1巻 第2号 1937
西尾実『日本語総力戦体制の樹立』1943
ベネディクト R.『菊と刀―日本文化の型』長谷川松治訳 現代教養文庫 社会思想社 1980
ヘルダー J.G.『言語起源論』（『ヘルダー言語起源論』）木村直司訳 大修館書店 1987
保科孝一『国語と日本精神』1936
文部省『国体の本義』1937
「読者のQA」*The Daily Yomiuri* 2012.10.16
文部科学省　中学校学習指導要領解説　東京開隆堂出版 2008.9